

もくじ 日本画家、高橋廣湖の落款印 1P

千住掃部宿の「旧書留」から⑪(終) 3P 羽裏の富士 4P

足立史談

第599号

2018年1月15日

足立区教育委員会
足立史談編集局
足立区立郷土博物館内
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562
(29-308)

新出資料が伝える

日本画家、高橋廣湖の落款印

小林 優

平成二十九年(二〇一七)、郷土博物館では、千住ゆかりの日本画家、高橋廣湖(一八七五～一九二二)のご遺族より同家に伝来した廣湖にまつわる作品・資料を調査し、その一部をご寄贈頂く機会に恵まれました。その内容は単純に廣湖の遺作群であるだけでなく、廣湖の画業を省みる上

で重要な検証資料と成るものが多く含まれていました。そこで今回は、その中でも廣湖の画業検証に重要な役割を果たす一点として、廣湖の門人、亀井琴仙作の《廣湖落款集》についてご紹介します。

■書画における「落款」

「落款」(らつかん)とは、正式には「落成款識」(らくせいかんし)といひ、中国や日本の書画において、完成した作品の画面中に作者が書き

入れた名前や雅号などの署名や、押捺した印章のことを指します。特に印章の方は「落款印」ともいひ、木、石、金属など様々な素材に篆刻によつて、文字を浮かび上がらせる「陽刻」か、文字図案部分を彫り抜いて白抜きにする「陰刻」のいずれかで印文が刻み込まれます。またその形状も方形、円形、瓢箪形、鼎形など多様です。画家や書家は、姓名や雅号をはじめ、座右の銘、漢詩文などを刻んだ様々な形状、大きさの落款印を持ち、作品の趣や大小、あるいは制作の時期ごとに使い分けて作品の中に押捺するのです。

このような「落款」は必ずしも署名と印が揃っているとは限らず、署名だけの場合や、印だけが押捺されている場合など様々ですが、署名には制作した年月や場所、由来などが付記されることもあり、また制作者の署名や印の情報を整理していけば、その書き方の特徴や印の形状・印文などが、作者および制作時期の

特定といった検証に際して、基本的かつ重要な手がかりとなるのです。

■《廣湖落款集》の作者、亀井琴仙

その中で、今回寄贈された内的一点、《廣湖落款集》(図1)は、廣湖が使用した落款印を駆使して図様を形作ったというユニークな一作です。

作者の亀井琴仙(かめい きんせん、生没年不詳)は、本名を啓三郎といひ、その詳細な経歴は不詳ながら、明治三十九年(一九〇六)に讃岐から上京して廣湖の書生となった人物です。廣湖のエピソードとして、明治四十年(一九〇七)の第一回文部省美術展覧会(文展)に出展する作品の完成度が気に入らず、会場となる上野公園の元東京博覧会美術館に忍び込んで仕上げをしようとしたという話がありますが、この時に廣湖に伴って一緒に忍び込んだのが琴仙だったと伝わります。

このような逸話から、琴仙は廣湖にとつて最も身近な門人であったと考えられますが、明治四十五年(大正元、一九一二)に廣湖が没した後の足跡は定かではありません。

門弟である琴仙がどの段階でこの《廣湖落款集》を制作したのか、その具体的な時期は定かではありませんが、師の生前にその印を自身の作画に使用することは考え難いことから、あるいは廣湖が没した後に、追善あるいは何らかの記念の意図で制作されたものと推測されます。



図1 亀井琴仙 《廣湖落款集》
紙本淡彩 明治～大正頃 当館蔵

■《廣湖落款集》に捺された落款印

《廣湖落款集》は、琴仙の筆による桔梗、すすきなどの秋草の入れられた竹籠の中央で、大小様々な形の廣湖の落款印が山形を作っており、まさに落款集の体裁を成しています。

画中に押捺された廣湖の印は総計五十種であり、その大部分は姓名雅号を印文として刻んだものですが、この他、漢詩文や堂名を刻んだものが数点確認でき、その内訳は次のようになります。

○姓名雅号…三十九種

印文：「廣湖」「廣湖画印」「高橋廣湖之印」「高橋」

○堂名…二種

印文：「晩成堂」

○園名…五種

印文：「山榭園」「くちなしえん」「山榭園主」「山榭園主之印」

○漢詩・四字熟語…四種

印文：「大器晩成」など

廣湖の没後に刊行された『故高橋廣湖作品画集』を見れば、廣湖が自ら落款印を捺して図様を作った《印譜》という、本作と同趣向の作品が掲載されており、そこには本作には



図2 《廣湖落款集》中の落款印「山榭園主」

見られない印が数種確認出来ることから、《廣湖落款集》は落款印の大多数を収録しているものの、必ずしもその全てを収録しているわけではないと見られます。しかし、ここに見られる落款印の数々は、廣湖の画業と作品を検証するにあたり、大きな示唆を含んでいるのです。

■「山榭園」印から見えるもの

前述の内訳にも見える通り、廣湖の落款印は、大多数が姓名雅号を印文としたものであったと見られますが、廣湖の画業の一端を検証する上で特に注目すべきなのが「山榭園（くちなしえん／さんしえん）」（図2）の落款印です。

画家・書家の名乗る雅号は必ずしも一つであるとは限らず、例えば建部巢兆の「秋香庵」「酒井抱一の「雨華庵」などのように、居室や部屋、庵につけた名称がそのままその人物を示す別号としても扱われ、印文に刻まれることがあります。この慣習は明治以降の画家たちにもある程度引き継がれ、横山大観にも邸宅の客室である「鉦鼓洞」の名を使った「鉦鼓洞主」印のような例があります。

堂名として刻まれたと見られる「晩成堂（ばんせいどう）」は現段階において廣湖の居室に由来するか定かではありませんが、特にその場の主人という意味の「山榭園主」の印文もある「山榭園」は、廣湖の別号であるとともに、その居室の名称で

あったと断定出来るでしょう。

廣湖は、師の松本楓湖のもとを独立して以降、

①浅草区浅草三好町

居住期間：明治三十三年～四十年

②下谷区二長町

居住期間：明治四十一年～四十三年

③本郷区湯島天神町

居住期間：明治四十三年～四十五年と三度、居を構えています。このいずれが「山榭園」であったかを明確に記した記録は確認されていませんが、明治四十四年（一九一一年）九月十七日の『読売新聞』に掲載された廣湖自身による論説「不言実行」を見ると、日本画家の姿勢について論じるその末尾で「愈々以て日本畫の滅亡ではなく、存在否發達論を意味して居らぬであらうか、能く、味へば面白い説である。此は失禮、又しても、口なしの花を忘れた。山榭子口なし！不言実行！」と不言実行の信条が「口なし」山榭子」にかけて、述べられているのです。

この「不言実行」「口なし（山榭子）」という文言は、これ以前の廣湖の投稿記事の中には見出だせず、廣湖にとつて特にこの明治四十四年の頃の廣湖の信条として意識されていたと推測されます。そして「口なし（山榭子）」の信条と、同じ文言を持つ「山榭園」は、まさにこの信条を反映して名付けられたと見られ、それらの点を鑑みれば、「山榭園」はこの記事の掲載された前年、明治四十三年に構えた湯島天神町の居室の名称であると考えるのが妥当と言えます。そしてそこから、「山榭園」の落款印の押捺された作品は、湯島天神町に居を構えた明治四十三年から没する明治四十五年までという、廣湖の三十七年の画業のまさに最晩年に描かれた作品と考えられるのです。

高橋廣湖に関する検証は未だ途上と言えます。その過程で、今回のような情報の整理は欠かすことの出来ない重要な作業です。今回は《廣湖落款集》を通して落款印を検証する作品が見出されたが、今後より多くの作品が見出され、検証の幅が広がっていくことでしょう。

（郷土博物館学芸員）



「山榭園主之印」の印のある当館所蔵の廣湖作品《湖畔月夜》



袴を着用する宿役人

多田 文夫

前回に続いて千住宿の役人（上層町人）の身分に関する資料が記載されているので、まず資料を紹介しよう。最終回にちょうど良い四宿の身分指標が内容である。

【宿名主袴着用証文】 (19丁裏)

差上申一札之事
一、安永九年子六月廿九日、三宿名主共上下願始而道中御奉行所安藤弾正少弼様江
(20丁表)
願出候、御懸り甲斐庄武助様、三ヶ年之間程之御糾御座候、

差上申一札之事
東海道品川宿名主問屋共儀、御奉行所江罷出候節ハ上下着用いたし来候処、千住宿、板橋宿、内藤新宿名主問屋ハ羽織袴ニ而罷出候得共、江戸口々之宿々ハ品川宿共同様之儀ニ御座候間、当三ヶ宿名主問屋共も以来上下着用仕、罷出候様
(20丁裏)
いたし度旨、奉願候二付、願之通御

奉行所江罷出候節ハ上下着用可致旨
被 仰渡、難有奉畏候、仍而御請証文差上申候処如件、

日光道中

千住宿

天明二寅年

庄左衛門

十一月廿九日

中山道

板橋宿

市右衛門

(21丁表)

甲州道中

内藤新宿

名主惣代
問屋惣代

市右衛門

道中

御奉行所

安藤弾正少弼様御役替、此節之御奉行桑原伊予守様ニ而被仰付候、御掛り甲斐庄武助様

【課題17 袴の着用】

■三つの宿場からの願い 千住宿、板橋宿、内藤新宿という江戸四宿のうち三宿から出された袴（かみしも・文中では「上下」）着用に関する証文である。この文書が出された天明二（一七八二）年、江戸四宿のうち御奉行所（道中奉行所）に出座するとき四宿のうち品川宿の名主と問屋が袴を着用しており、千住・板

橋・内藤新宿の三つの宿場役人が羽織袴であったので、三つの宿場の名主・問屋が袴着用を願い出て、道中奉行から認められたと記述している内容である。

■安藤弾正 この時の道中奉行は安藤惟要（あんどう・これとし）で、道中奉行として各地で善政を敷いたとされ、その官途名、弾正少弼（だんじょうしようひつ）から安藤弾正として知られた（在職一七六一～八二）。大宮宿では安永四（一七七五）年の大火での救済者として知られ、千住宿では飯盛女（遊女）の公認者としても知られている。

さて、資料再末尾の注記によると役替えがあり、次の道中奉行、桑原伊予守盛員（くわばら・いよのかみ・もりかず）の時に認められ、担当者は甲斐庄武助（勘定組頭）だったという。奉行の任期を超えるのだから短期間に認められたわけではなかったのだろう。

■袴と羽織袴 当時、身分指標として羽織袴より袴が上位であったため、品川宿のみが袴を着用していることに、他の千住、板橋、内藤新宿が連名で願い出たということが面白い。祭礼時などで袴を着用していたことは前回も触れているが、十八世紀のこの時期、四宿の名主問屋が、公的な場でも身分格式を強く意識していたことが見えてくる。

道中奉行（実は勘定奉行も兼務する幕府の三奉行の一つ）に願い出てまで袴を着用した。このことは公私ともに、宿場役人が格式を高く保つ社会意識があったことを示す。

江戸時代に千住宿の人々がどのような衣装を着ていたのかは余り資料が残っていないが、本資料などから公的な場では袴を着用し、脇差を腰に差している姿が見えてくる。映像や絵での復元の参考になろう。

【課題18 水害記事】 (20丁裏)

天明六年七月十二日より丙辰十三日昼夜大雨、十四日夜五時、壹町目水惣越相成、廿日より水干浮相成候家等居宅ニ而水丈壹丈余、往還より三尺余水深ク御座候、
小塚原名主弥右衛門宅ハゆかうへ少し揚り申候、町並ハ少しも水上り不申候、
(裏表紙表) 空白
(裏表紙)

石出弥五右衛門

■大水害記事 唐突感があるが本資料は次の記事で終わる。千住や足立らしい一般的な水害かという点異なる。天明六（一七八六）年の洪水は江戸時代の中でも大規模な水害であった。被害者は数千にのぼったとされ、品川近所の鈴ヶ森には犠牲者が多く

流れ着いたという。幕府や代官も握り飯の炊き出しを行い(芝居小屋にも握り飯を出すように命じた)、救済に乗り出した大洪水であった。

千住での水害だが大雨が降った翌々日に一丁目が冠水し町裏の居宅では1丈(3m余)冠水したという。まさに大洪水である。

* * *

「旧書留」はここで終わる。十一回にわたって全文を掲載したが、最終回なので今回の資料翻刻について触れておきたい。

千住宿や足立区の江戸時代の様子については古文書の解読によって明らかにしていくが、今日、解読が終わった古文書はおそらく1%にも満たないだろう。

幸いにして博物館では古文書を解読しようというボランティアさんや登録グループなど協働団体が活動を続けているので、今後も明らかになっていく事項が多いだろう。

これはひとえに、今日まで記録や古文書を伝来した家々の尽力に負うところが大きい。先ほど「解読は1%にも満たない」としたのは、実は古文書の伝来数が多いことの反映でもある。

古記録、古文書を読み解くことで判明する史実は多い。著名な例では新選組の五兵衛新田屯所の事例である。司馬遼太郎が『新選組血風録』

を上梓した時には、綾瀬・金子家文書は発見されていなかった。そのために同書では五兵衛新田は登場しなかった。しかしその後、発見と解読、資料評価が行われ知られるようになっていく。NHKの大河ドラマ「新選組!」では五兵衛新田のシーンも登場するなど今日では新選組の歴史の1ページを飾っている。

古文書の他にも江戸絵画も歴史を物語る資料である。新資料が確認され、評価と紹介が進むことで、新しい歴史像が生み出されてくる。『別冊太陽 江戸琳派の美』では千住の琳派が立項され、足立や千住地域の文化の華やかさが全国的に知られるようになっていく。

いま足立区では古文書も美術資料も相次いで区内から見いだされ、解読↓評価↓事業での紹介を立て続けに行っている。江戸から明治の歴史と文化についていま博物館は取り戻す作業を続けている。最近インターネット(ツイッター)で「足立区の素性が良かったことが判った」という一般の感想に代表されるように、私たちは自分たちの歴史と文化を忘れていたのである。今年には明治維新一五〇年という。一五〇年前には足立で花ひらいていた遺産を博物館では正當に継承する作業が続いている。

(博物館学芸員)

羽裏の富士

開催中の「寿展 めてたづくし 暮らしの中の吉祥紋」(2月12日まで)で展示中の黒紋付の羽織の裏地には富士山が刺繍されています。

羽織の裏地は、羽裏(はうら)といわれ、脱ぎ着がなめらかにできるように、羽二重などが使われています。着ているときは見えず、脱いだときにしか見られないこの部分に、意匠を凝らすことが、粋であり伊達であるとされました。

それまで贅沢な刺繍や派手な色柄やデザインのものを着ることを誇っていたところ、江戸時代に入り奢侈禁止令がだされることによって、見える表面ではなく、裏地に凝ったことが始まりといわれています。見えないところに凝縮される表現方法に、返って、着手の趣味や審美眼が反映されるように昇華されていきました。



黒紋付羽織
梅原睦子氏寄贈

羽裏には通常の染柄や刺繍などを施した生地のほか、著名な文人による絹布への直筆の絵画や書なども使われます。「裏勝り」といい、表面の生地より羽裏の方が高価で質が高いというようなこともありました。何かの時にちょっと脱いだ羽裏に見える贅に、「さすが!」とその持ち主の人となりを感じるわけです。

一枚の生地から袖や襟など仕上がりを想定して柄の配置を決めるのは職人の技術によるものです。展示中の羽裏の富士は着物の中心に思い切り大きく表現されています。銀糸で表現された瑞雲からそびえる、頂上に向かって青の濃淡二色で微妙に色分けされた山肌、山肌に沿って積もる白雪、それが黒い着物に映え、まさに霊峰富士の様相を示しています。

左右の星梅鉢の家紋の位置が、あたかも富士信仰の掛け軸に描かれる月と太陽に見えるようになるところまでが、富士山の神々しさを際立たせ、神秘さまで表しています。

この羽織は、刀剣の研磨、鑑定等を家職として室町時代から続き、江戸時代初期には本阿弥光悦を生んだ本阿弥家に縁の品です。

富士は「不二」、「不死」と同音であることはもちろん、存在そのものが縁起物であり、それを背中に背負うことでの、着手の人知れない自負や気概などを見てとることができま

(郷土博物館)